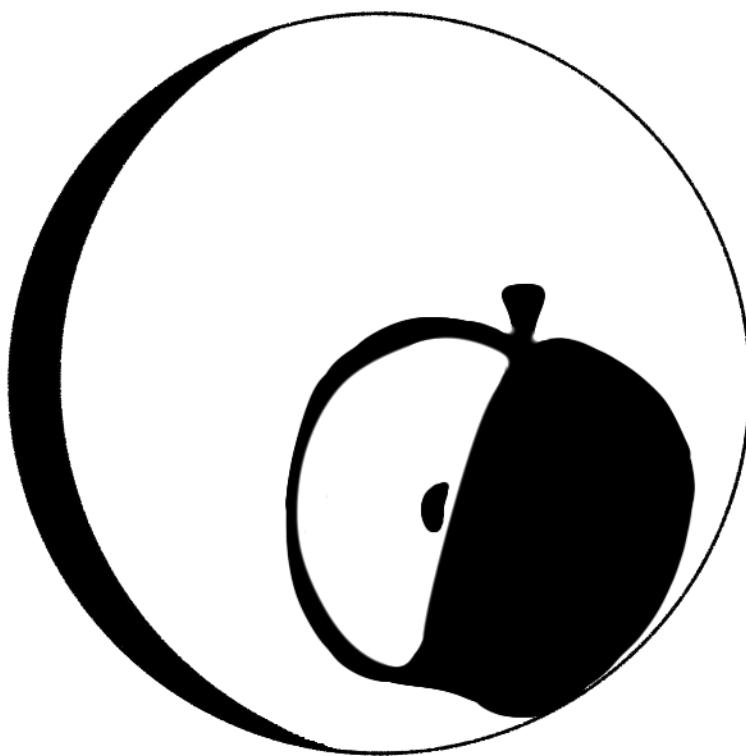


かげぼうし

令和 7 年 11 月号



狐鶴堂

童心にもどるための謡

そういうものがあったって良いと思う
という気持ちで、
原風景や幻想を書き残している。

つぎつぎ生まれた童謡たちは、
季節の背後に伸びてしまった、
さみしいさみしいかげぼうし。

赤いもの

赤いもの なあに

泣きたい時間のガラス窓。

赤いもの なあに

ブリキでできた消防車。

赤いもの なあに

あつと見上げたななかまど。

赤いもの なあに

寒さに気づく指の先。

さくらの落ち葉

日の昇るほうにある木から、
秋のさくらは色づいて、
日を浴びながら落ちてつた、
葉っぱを拾えず泣いている。

白鳥

月にも見られぬ奥の木は、
ある日いきなり照れだして、
霧にもまれて落ちてつた、
葉っぱに気づかず震えてる。

雪まだ降らぬ こーいこい
お仲間 早う早う こーいこい
空から声が降つてくる
白鳥、白鳥、こーいこい

本誌に収録された詩の無断使用および無断転載を禁ずる。



童謡小冊子「かげぼうし」11月号

発行日：令和7年11月15日

発行・著：入山夜鶴（狐鶴堂）

X(旧Twitter)：@812_iri

Mail：yaits_bngk @ outlook.jp

Portfolio：potofu.me/812iri →

